

WS 3	昭和・文学・温泉			※講義の後に討論あり	
	【定員】30名		【受講料】2年・1年会員ともに8,580円		聴講生10,010円
	『歴史・文学・人間学』【ワークショップ】文学		【時間】毎回 13時00分～ 15時00分 (計6回)		
概要	このWSでは、日本近現代文学史を学ぶ中で一度は耳にしたことがあろう作家の作品を取り上げ、受講生の皆さんと読んでいきます。現代の感覚ではとらえ難い同時代の政治・文化状況などに関して丁寧に注釈を加え、従来の議論を紹介し、多角的に作品を捉え直していきます。また、今期は、第二次大戦をはさむ前後の多種多様な作品をテキストに選出していますが、温泉を舞台とするという共通点を持っているため、作家間でのそれを描くスタイルの差や、温泉そのものの歴史的な変容を看取することを通して、社会的・文化事象がいかに『文学』と切り結ぶ契機を持ち得るかを考えていきます。				
回	月/日(曜)	会場	学習内容		講師名(敬称略)
1	10/4(水)	川崎市 生涯学習 プラザ	萩原朔太郎『猫町』(岩波文庫、青空文庫) 1935年発表。独特な一人称と映像的イメージを活用するという詩人朔太郎の独特の言語表現に着目しながら、本作の有り様について考察する。		相模女子大学講師 安藤史帆
2	10/25(水)		林芙美子『浮雲』(新潮文庫、角川文庫、青空文庫) 1949-1951年発表。女性の身体(と傷)の表象に着目し、戦争と敗戦をめぐる記憶を内包する本作の有り様について考察する。		
3	11/15(水)		田宮虎彦『銀心中』(新潮文庫、角川文庫、小説文庫) 1952年発表。戦争を契機に(あるいは温泉を舞台に)対になる男女関係がいかに破壊され、あるいは修復されるのかに着目しながら、本作の有り様について考察する		
4	12/6(水)		藤原審爾『秋津温泉』(新潮文庫、集英社文庫) 1947年発表。戦前の甘い記憶を蘇らせ、我執に充ちた主人公をも浄化させ、「夢」をもたらす場として認識される戦争直後の「温泉」に着目しながら、本作の有り様について考察する。		
5	1/10(水)		島尾敏雄『冬の宿』(『島尾敏雄(ちくま日本文学全集)』新潮文庫) 1954年発表。現実(日常)から離脱された異界として立ち上げられた温泉という場に着目しながら、本作の怪異譚としての有り様について考察する。		
6	1/31(水)		大岡昇平『花影』(講談社文芸文庫、集英社文庫) 1961年発表。同時代の背景や、実在の人物をモデルとすることに配慮しながら、幻想的に組み上げられた本作の有り様について考察する。		